

第1日曜日

主日第一礼拝 9:00～

主日第二礼拝 10:30～

その他の日曜日

教会学校 9:00～

主日第一礼拝 9:00～

主日第二礼拝 10:30～

日本基督教団 麻布南部坂教会会報

2023 (令和5年) 3. 12

牧師 松谷 祐二

〒106-0047 東京都港区南麻布4-5-6 Tel & Fax 03(3473)1276

E-mail church@nanbuzaka.com https://www.nanbuzaka.com/



印刷 有限会社 創文社 Tel (3491) 8321

祈祷会

第2日曜日 礼拝後

成人会

第3日曜日 礼拝後

婦人会

第4日曜日 礼拝後

教会附属 南部坂幼稚園

「永遠の命を信ず」

牧師 松谷 祐二

ヨハネによる福音書 第三章一六節

神は、その独り子をお与えになつたほかに、世を愛された。独り子を信じる者が一人も滅びないで、永遠の命を得るためである。

(新共同訳聖書)

これは、聖書の中でも特に有名な聖句の一つ。「独り子」とはイエス・キリストのことです。もともと神と共に、神の世界におられた、神の子イエス。神はこの大切な独り子を手放して、人間の世界に贈ってしまわれた。その目的は、「イエスは神の子、キリスト(救い主)」だと信じる人に、一人の漏れもなく、「永遠の命」が与えられるように、ということであった、と言います。

「永遠の命」とは何でしょう。「ずっと生き続ける」ことでしょうか。たしかにわたしたちは、いつか死ぬのだと分かってはいても、なるべくそれを遠ざけ、生き続けたいと願う。しかし、考えてみると、「ずっと生き続けたい」と願うのは、わたしたちが「幸せだ」と思えばこそです。

何をもって幸せだと思ふかは人それぞれでしょうが、突き詰めれば、若い時でも、年を経ても、自分を愛してくれる人——自分の親、子、友達、恋人、配偶者、先生、仲間、その他誰であれ(ペットや動物植物、自然界からの愛を感じるという人なら、それらも含め)——が確かにいる、ということとは、根本的、本質的なことであるはずで、自分ひとりで、誰も自分のことを愛していない。誰も自分のこと知らないし、知ろうともしていない、となれば、「ずっと生き続ける」ことは無意味で、苦痛でしかないでしょう。

聖書に言う「永遠の命」を考えると、「ずっと生き続ける」ということ以上に、誰が愛してくれ、誰に愛されるか、ということの方が重要です。この点に深く関わることを、イエス・キリストは、ご自身の父である神に向かって祈る中で、こうおっしゃっています。

ヨハネによる福音書 第七章二〇三節

「あなたは子」わたしイエスにすべての人を支配する権能をお与えになりました。そのため「その権能によつて」、子「わたしイエス」はあなたからゆだねられた人すべてに、永遠の命を与えることができるのです。永遠の命とは、唯一のまことの神であられるあなたと、あなたのお遣わしになつたイエス・キリストを「わたしイエスをキリスト(救い主)として」知ることです。」

(「」内は筆者注)

「永遠の命」とは、神とイエス・キリストを知ることだ、とイエス自らおっしゃっている。ここに言う「知る」とは、ただ知識として覚え込むことではありません。わたしを愛してくださる方、愛しぬいてくださる方として、神とイエス・キリストと、出会い、体験し、感じ、味わい知ることです。

いつ、どのように、神とイエス・キリストがわたしを愛してくださつたか。わたしたちの生まれの前からです。神はわたしたちを愛して、この世の命を与えてくださいました。命と健康、日々の糧、すべて神からいただいたわたしたちは生きており、神はいつも、わたしたちを正しい道に導こうとなさっています。にもかかわらず神を忘れ、無視してしまう、罪深いわたしたち。それでもなお、神はわたしたちを愛し、赦して受け入れようとしてくださいました。

ヨハネの手紙一 第四章一〇節

わたしたちが神を愛したのではなく、神がわたしたちを愛して、わたしたちの罪を償ういけにえとして、御子をお遣わしになりました。ここに愛があります。

「わたしたちの罪を償ういけにえ」とは無論、イエス・キリストのあの十字架の死のことです。ここまでして、わたしを愛してくださる方、愛しぬいてくださる方として、神とイエス・キリストと、出会い、体験し、感じ、味わい知る。本当に

そうなつたら、わたしのほうでも当然、深い愛と信頼をもってお応えせずにはおられません。神とイエス・キリストに愛され、愛し、そういう中で「ずっと生き続ける」ことが許される。それが、「イエスは神の子、キリスト」だと信じるすべての人に与えられる、「永遠の命」です。

しかし、神とイエス・キリストとの愛の中で「ずっと生き続ける」と言っても、わたしたちはいつか必ず死ぬのではないか。それについて、イエス・キリストはこうもおっしゃっています。

ヨハネによる福音書 第一章二五・二六節

イエスは言われた。「わたしは復活であり、命である。わたしを信じる者は、死んでも生きる。生きていてわたしを信じる者は、死んでも、決して死ぬことはない。このことを信じるか。」

イエス・キリストは十字架の死と埋葬の後、三日目に復活して弟子たちに姿を現され、生きておられることを示してから天に昇られました。弟子たちは、神は、イエス・キリストを信じる人をもまた復活させてくださることを教わり、伝えていきました。この、信じる者の復活のことを指して、「わたしを信じる者は、死んでも生きる」と、イエス・キリストはおっしゃったのでしよう。

では「生きていてわたしを信じる者は、決して死なない」とはどういうことでしよう。信じる者だからと言って、死なないわけではありません。しかしイエス・キリストは、こうおっしゃっているのだと思います。わたしが与える「永遠の命」は、この世の死によつても断ち切られはしない。死を超えて続いていく。だから、信じる者は「決して死ぬことはない」のだ、と。

逆に言えば、「永遠の命」とは死んでしまつてからではなく、生きていく間にいたいただくもの、ということなのです。イエス・キリストを信じたその時から、わたしは「永遠の命」に生き始める。その命は、この世での死でも途切れることなく、神の御国に場を移して、続いていくのです。

この永遠の命の福音、永遠の命を与えてくださる神の愛を、教会はこれからも伝え続けます。

はつめまつり

横崎 太一

皆様はじめまして。この度、麻布南部坂教会の一員に加えていただきました、横崎太一（よこざき たいち）と申します。私は今年の二月下旬に、都内の会社に就職しました。

丁度洗礼式の翌日から研修が始まり、新しい誕生日を迎えたその翌日から社会人生活の一步を歩き始めることができました。昨年の十二月には二十歳にもなり、文字通りの節目の時期に洗礼を授けていただけただけに、深く感謝しております。

何かと不慣れで、至らない点が多々あるかと思いますが、どうぞよろしくお願いいたします。

さて、教会の門を最初に叩いたのが、昨年の五月頃だったかと記憶しております。当時の私は、公務員試験の予備校に通っていましたが、その前の年の九月には、高校新卒で始めた仕事を五カ月足らずで退職しており、何か次の目標を見つければと、公務員試験を目指していた、そんな時分でした。当時の私は、自信というものを完全に失くしていました。

思い返せば、私は幼いころから何かと自信のない子供でした。何かに挑戦して成功を掴む努力をするよりも、何もしないことでリスクを回避することにばかり重きを置いていました。友達付き合いでも、人から嫌われるかもしれないことを気にして、積極的に交わっていきたくありませんでした。

その傾向は、保育園を経て小学校、中学校、高校に至るまで続きました。色んなことを避けて、逃げ回ってきたせいで、連絡を取り合うような友達ほとんどいませんし、楽しかった思い出、大切にしたい居場所も

ありません。

しかし、そんな中で私はこの教会に招かれ、神様に拾っていただきました。初めて松谷先生の説教を拝聴したとき、自然と「もう一度聴きたい」と思いました。それから毎週のように教会に通い、先生を通して語られる神様からのメッセージに耳を傾け続けました。

私は、「神様はずっと前から招いてくださっていた」と感じました。神様は私を教会に招いてくださったって、居場所を与えようとしてくださったって。

私は、そのことに気付いた時、感動を覚え、神様に深く感謝しました。

これからの長い人生はなにがあるかわかりませんが、大きな困難に直面することがあるかもしれません。しかし、たとえそうであっても、私は神様に拾っていただいた事、居場所を与えていただいた事に感謝し、自信をもって生きていくことができると確信しています。

そして、神様が与えてくださったこの大切な教会を守るため、少しでも役に立てれば、そう思っています。

報 告

*教会員の高田聡子さんが、一月二十八日（土）、男の子を出産されました。おめでとうございます。

*二月十九日（日）の礼拝で、横崎太一（よこざきたいち）さんが受洗されました。主の祝福を心からお祈りします。

*教会員の橘和嘉姉が、二月十七日（金）、逝去されました。二月二十五日（土）一時より代々幡斎場にて家族葬が行われ、松谷牧師が司式を行いました。ご遺族のために祈りください。

《各部報告》

成人会

日 時…十二月十八日 主日礼拝後

開会祈祷…佐藤忠昭兄
内 容…エゼキエル書 十七章～十九章
各章を通してイスラエルの状況を神は悲しみ怒り、王を含め他宗教に傾き腐敗した状況を何とかしたいとする描写が続くが、十九章でキリスト教には「因果応報」はないとの牧師の言葉が強く心に残った。
(佐藤忠昭 報)

婦人会

日 時…一月二十二日 主日礼拝後

出席者…八名
開会祈祷…菊池才知子姉
内 容…列王記上 二十章～二十二章
二十章 アラムの王ベンハダドとイスラエルの戦いで主に守られたイスラエル王アハブはベンハダドを、無事に帰国させた。二十一章 イズレエルの人ナボトは、アハブ王の宮殿の近くにブドウ畑を持っていた。アハブは園畑を譲りうけようとナボトにもちかけたが拒否された。アハブの異教の妻、イゼベルの陰謀でナボトは殺害された。預言者エリヤに主の言葉が臨んだ。アハブが主の前にへりくだったので、再び主の言葉がエリヤに臨んだ。
二十二章 主はご自身の名誉のためにイスラエルとの約束を果たされる。
(菊池才知子 報)

「主」がこれを行われたことを彼らは知るようになる。
次回三月十九日。
(下奥敏子 報)

日 時…一月十五日 主日礼拝後
出席者…四名
開会祈祷…菊池才知子姉
内 容…エゼキエル書 二十章～二十二章
イスラエルは異郷の地エジプトの奴隷であった時から偶像崇拜を取り入れ、主に背信を続けていた。主なる神は、イスラエルをエジプトから導き出し、生きるための掟を与え、裁きを示した。しかし、イスラエルはその後、主に背き続けた。主は憤って背くイスラエルを罰するためにバビロンの武装勢力をエルサレムに送る。エルサレムは陥落し、イスラエルはバビロンの捕囚となる。主は最終的にバビロンをも裁く。
(菊池才知子 報)

日 時…二月十九日 主日礼拝後
出席者…三名
開会祈祷…下奥敏子姉
内 容…エゼキエル書 二十三章～二十四章
偶像礼拝にのめりこんだ南北両王国を、夫（神）を裏切り、奔放な生活をして身を汚したオホラとオホリバの姉妹にたとえた箇所。神の怒りが彼らに臨む。エゼキエルの妻の死は、バビロニアによるエルサレム滅亡の予表とされた。それが実現したとき、

日 時…二月二十六日 主日礼拝後
出席者…七名
開会祈祷…菊池才知子姉
内 容…列王記下 一章～二章
アハブの子アハズバヤは屋上から転落し、病気になるので自分の予後を、神託を仰ごうとした。イスラエルの神は憤って預言者エリヤに神の意志を伝えさせる。イスラエルの神を無視したアハズバヤは二度と寝台から降りることなく必ず死ぬと。エリコで預言者エリヤは嵐の中を天に上った。エリヤの弟子エリシヤは師と別れ際に師の霊力を二つ受け継いだ。エリシヤは異教の偶像を礼拝し、預言者に敬意を払わない街の人々に警告を与えた。
(菊池才知子 報)